

# 子どもの自身のもつ力を尊重したかかわり方についての研究 ～プレイセラピーからみえてくる子どもの姿と心の動きを通して～

三重県教育委員会事務局  
研修企画・支援課  
研修員 中山 映美

## I 研究の目的

三重県総合教育センターの教育相談班では、プレイセラピーを中心とした教育相談を行っており、教育相談では一人の子どもにじっくりと向き合い、子どもの育ちに寄り添っていくことができる。そこで、集団にかかわるときの「育てる(育つ)」と「教える」のバランスについて考えていくために、まずは個人が育つことに目を向けて、子ども自身のもつ力を尊重したかかわり方についての研究をしようと思った。

本研究ではプレイセラピーから見えてくる子どもの姿と心の動きを通して、子ども自身のもつ力を尊重したかかわり方について考察し、学校現場における子どもとのかかわりのヒントを探すことを目的とした。

## II 研究の内容

### 1 プレイセラピーとは

子どもに対して用いる心理療法の一つで、遊びを介して行われる。子どもとセラピスト(治療者)の適切で特別な対人関係の中で、安全な環境と遊び道具を使って、子どもが自分の気持ちや考えを表現したり探索したりするのをセラピストが促進し手伝うものである。

#### (1) 子どもにとっての遊び

子どもにとって遊びは自然なものであり、成長に欠かせないものである。

#### (2) セラピストの態度

アクスライン(1972)は、プレイセラピーの基本原理の中に、次のことをあげている。

- ① セラピストは、子どもの感情を敏感に察知し、察知したその感情を適切な形で子どもに伝え返し、子どもの洞察を促すようにする。
- ② セラピストは、子どもが適切な機会さえ与えられるならば、自分で自分の問題を解決できる能力を持っていることに信頼を置き、解決の道を選び取っていく子どもの主体性を尊重する。
- ③ セラピストは、いかなる形でも子どもに指示を与えようとはしない。子どもが治療をリードし、セラピストはそれに従っていく。
- ④ セラピストは、治療を早く進行させようとはしない。治療は徐々に進展するプロセスであることを認識している。

セラピストは、「子ども自身のもつ力は必ず動き出す」と信じて子どもにかかわるが、かかわりが不足しても、過剰すぎてもその力は動き出さない。かかわりが適度であった場合に、子ども自身のもつ力が動き出す。セラピストのかかわりが、子どもにとっての適度なかかわりに近づくために、感情を敏感に察知し、適切な形で子どもに伝え返すことを繰り返しながら、子どもに従っていく。それが、解決の道を選びとっていく子どもの主体性を尊重する姿勢である。すなわち、アクスラインの提唱しているかかわりこそが、「子ども自身のもつ力を尊重するかかわり」なのである。

テーゼ  
(方針)

【子ども自身のもつ力を尊重したかかわりとは】

子どもの感情を敏感に察知し、適切な形で子どもに伝え返すことを繰り返しながら、子どもに従っていくかかわり

### 2 子ども自身のもつ力

#### (1) 学校生活と子ども

子どもたちは、「許し合う力」「自覚する力」「立ち上がる力」などの力をもっている。

## (2) 心の治癒力

消極的だった子どもがよりよい方向へと変化を遂げるときには、子ども自身もつ力が動き出すための原動力となる力(=心の治癒力)がはたらいている。身体的な疲労や心理的なストレスがたまってくると、心の治癒力は本来の力を発揮できない。睡眠をとり疲労を回復することや人とのかかわりリフレッシュすることなどで、心の治癒力が本来の力を回復していくと考えられる。

## (3) 子ども自身のもつ力が動き出すということ

心の治癒力は子ども自身のもつ力が動き出すのに欠かせないものである。セラピストや教師は、「子ども自身のもつ力を尊重したかかわり」(テーゼ)を続けていくことで、子どもの心の治癒力にエンジンをかけ、子ども自身のもつ力が動き出すための後押しができる。



心の治癒力と子ども自身のもつ力の関係

## 3 プレイセラピーの場面から

教育相談で出会った子どもとのかかわりの一部をいくつかのエピソードとして取り出し、以下の観点から考察した。

観点A (考察A)	セラピストのかかわりが、子ども自身のもつ力を尊重したかかわり、つまり子どもの感情を敏感に察知し、適切な形で子どもに伝え返すことを繰り返しながら、子どもに促っていくかかわり(テーゼ)となっているか。かかわりの構造を考察する。
観点B (考察B)	プレイセラピーの中で、一体何が起きていたのか。子どもの姿と心の動き、セラピストのかかわりの本質を考察する。

考察Aでは、各エピソードでのかかわりの構造を考察し、セラピストのかかわりが子ども自身のもつ力を尊重したかかわりであったかどうかを確認していった。以下に各エピソードから抽出できた子ども自身のもつ力を尊重したセラピスト(Th)のかかわりと、それに関連していた子ども自身のもつ力を挙げる。

	(子ども自身のもつ力を尊重したかかわり)	という Th のかかわりと	子ども自身のもつ	(子ども自身のもつ力)
1	待つ	という Th のかかわりと	子ども自身のもつ	イメージを広げる力
2	共感を伝える	という Th のかかわりと	子ども自身のもつ	感情を表現する力
3	制限を与える	という Th のかかわりと	子ども自身のもつ	収める力
4	問いかけて話を聞く	という Th のかかわりと	子ども自身のもつ	自分を認める力
5	活動を継続し待ち続ける	という Th のかかわりと	子ども自身のもつ	再起する力

考察Bでは、かかわりの本質を考察していった。子ども自身のもつ力が動いているとき、子どもは心の中にいる自分と向き合いながら心の仕事を行っていることがわかった。

## III 成果と課題

セラピストや教師は子ども自身が本来もっている力の芽を摘み取ることなく、育て、高め、子どもに従っていくかかわりを続けていくことが大切である。なぜなら、一つひとつのかかわりが積み重なることで、セラピスト(または教師)と子どもとの間で心の対話が紡がれていくからだ。

今後、筆者が学校現場で子どもとかわるときに取り入れていきたいことは、教育相談でふれた臨床の知である。それこそが子ども自身のもつ力を信じ、尊重することそのものだと感じるようになったからである。また、この研究のきっかけとなった「育てる(育つ)」と「教える」のバランスについて考え続けながら実践を重ねることが、学校現場での子どもとのかかわり方に何よりも寄与することである。

つまり、それは筆者個人だけでなく子どもにかかわる全ての人々と自然な形で臨床の知を共有していくことである。そのために、子どもについて語りあう場を大切にしたい。また、教師として、人間として臨床の知についてさらに学び続け、深めていきたい。